

# 3・11後の建築・まち

# われわれは明日どこに住むか

定 住を超えた移動、移住を組み込んだ交流と歓待の社会 糸長浩司

ゼロから考える 私を超える 伊東豊雄

小さな環境世界 再生可能エネルギー 循環型社会 中村勉

事前復興 まちづくり市民事業 佐藤滋

近代の敗北 関係という主体 定住=永遠の営みへの確信 内山節

レジリアンスな社会 Safe to fail 乾いた理性 横張真

節電という社会実験 自立する建築 野原文男

地域遺伝子 連続体と自然体 ヨコミゾマコト

定常社会=地域固有の特徴・多様性・価値が再発見される社会 広井良典

非同期を促すパラダイム 共同的身体性 中谷礼仁

モノは壊れても再起できるしなやかな社会 岡部明子

まちを継続する力の衰退 牧紀男

かたちの再認識 篠崎健一

近代的な科学思考の限界 やわらかい境界をつくる 小玉祐一郎

2011年度日本建築学会大会（関東）記念シンポジウム出版編集委員会

委員長 糸長浩司

幹事 篠崎健一＋中村美和子＋野原文男

委員 北澤大佑＋關正貴＋藤沢直樹

## はじめに

3月11日に起きた未曾有の東日本大震災は、2万人近い人命を一瞬のうちに奪い、今なお続く苦しい避難生活を多くの被災者たちに強いています。さらに、現在も続く、収拾の見えない福島原発事故による放射能汚染、放射能公害は、復興の展望とそのシナリオが描けないほどの長期的で複雑な被害を及ぼしています。

人口減少や高齢社会、格差問題、地球温暖化、ピークオイル、資源枯渇と生物多様性の危機、地球的都市スラム化と大規模災害の多重・多発化という地球的課題が未解決な状態の中で、この大震災が日本で起きました。

私たちは、これらの多重で複雑な課題をどう克服し、新たな価値と理念に基づく復興・再生のビジョンとその姿・かたちをどう描くのか。現在、新たな再生の芽が、被災地での被災者たちと支援者たちの復興協働活動の中に生まれてきていることも確かです。今後は、建築や都市の担い手、農山漁村の地域社会の担い手にも、今までとは異なる社会システム、視点、感性・知性、職能が必要となることは間違いありません。

本書は、「大災害を克服し、未来の建築・都市へ」と題した、日本建築学会大会記念シンポジウム（2011年8月23日）の記録をベースとして再構成したものです。建築だけでなく、哲学、社会学、ランドスケープという多様な分野の第一人者たちによるクロストークにより、大災害にも耐え、回復力のある、未来の建築・都市・地域像、社会像のビジョンとアプローチ・ロードマップを議論しています。

本書が、大震災を克服し、新たな日本の姿を描き、行動するための一助となることを祈念します。

2011年10月26日

編集委員会主査 糸長浩司

はじめに

3

序 3・11後のしなやかに住むデザインへ 糸長浩司

7

## I ゼロから建築を考える

個によって個を超えられるか 伊東豊雄

22

コ・ラ・ム・Ⅰ 仮設公民館建設 杉本洋文

43

## II 3・11後の建築・まち

ふくしま浜通りの復興 中村勉

46

コ・ラ・ム・Ⅱ 木造応急仮設住宅 中村美和子

59

試されるまちづくりの思想 佐藤滋

61

コ・ラ・ム・Ⅲ 復興コミュニティ 大月敏雄

77

近代の敗北 内山節

79

コ・ラ・ム・Ⅳ 放射能禍と飯舘村 浦上健司＋關正貴＋飯舘村後方支援チーム

89

## III クロストーク

その1 定住するとは何か 内山節＋糸長浩司

92

その2 未来の建築・まちについて

96

糸長浩司＋横張真＋野原文男＋ヨコミツマコト＋広井良典＋中谷礼仁＋岡部明子＋牧紀男＋伊東豊雄＋佐藤滋＋中村勉

コ・ラ・ム・Ⅴ 都市・農村計画者の決意 藤沢直樹＋北澤大佑

131

## IV まとめに代えて―座談会

3・11後の建築・建築家のサバイバル戦略

134

糸長浩司＋篠崎健一＋中谷礼仁＋小玉祐一郎

133

資料編 (学会大会シンポジウム冊子より)

157

あとがき シンポジウムを終えて考えたこと 小玉裕一郎

194

# 個によって個を超えられるか

伊東豊雄

建築家は3・11の衝撃を隠さない。それは、「建築家」像への問いかけへとつながる。「個」としての建築家が、いかにして「みんな」という複数の主体をデザインできるのか。人が集まる行為・かわりかたちにするという試みから、建築の原点を見据える。被災地における様々なかわりの中から模索がはじまった。

## 「個」としての建築家

ちょうど、3・11の震災からまもなく6か月を迎えようとしております。今年はこちらが私が独立して仕事を始めてから40年になります。そんな時期に、この大震災に遭遇し、私の建築家人生において最大の事件とも言えるでしょう。そこで、自身の建築思想をもう一度ゼロから考え直さないといけないというつもりで、現在、様々な地域や人々とかわりをもつて活動をしています。

今回のタイトルは「個によって個を超えられるか」です。「個」とはわれわれ建築家のことです。こういう震災の時にはなかなか建築家には「公（おおよけ）」からは声がかからない。都市計画家は違うかもしれませんが、われわれ建築の設計をやっている者に

伊東豊雄（いとう・とよお）  
建築家

1941年 京城（ソウル）生まれ  
1965年 東京大学工学部建築学  
科卒業

現在、伊東豊雄建築設計事務所代表  
代表作品：「シルバーハット」  
（1984年）、「せんだいメディア  
ターク」（2001年）

はまず声はかからない。復旧・復興にかかわりたいと思っても、そういう機会が建築家にはない。建築家としていったい何が可能なかを、「個」という言葉によって表現させていただきました。

## せんだいメディアタークの被災

私は東京のオフィスで3・11の地震を体験したのですが、まず気がかりだったのは10年前にオープンした「せんだいメディアターク」のことでした。1995年の3月22日に行われた、このコンペティションによって私はこの仕事を引き受けることになりました。

実は、大震災の起こった翌日の3月12日に、「せんだいメディアターク」で10周年のお祝いの会が予定されており、奥山恵美子市長等とシンポジウムをすることになっていました。

「せんだいメディアターク」は、2001年1月25日に正式オープンし、それから10年間多くの市民に愛されてきました（写真）。私が一番良かったと思っっているのは、ここへ人々が目的があつて集まるばかりではなく、目的がないときにも集まってくれたということなのです。

ただコーヒーを飲みに来てくださる方もたくさんおられますし、お年寄りがパソコン教室に通ったり、その隣で学生がワークショップをするというように、子どもから



写1 せんだいメディアターク（撮影：彰国社写真部）



写8 仙台市宮城野区のみんなの家は10月26日に落成式を迎えた。式典後には完成を祝って仮設住宅住民主催の芋煮会が開かれた



図1 宮城野区のみんなの家の平面図

それと同時に、ちょうど私の建築ミュージアム(今治市伊東豊雄建築ミュージアム)が、今治市に属する大三島という島に先月(2011年7月)末オープンしたので、それを機に世界の建築家からこの「みんなの家」のイメージを募集しました。今治の小学校の700人ぐらいの子どもたちが「みんなの家」をテーマに絵を描いてくれました。それを今、大三島のミュージアムとせんだいメディアテークの1階で展

### 「みんなの家」のイメージ

もうちょっと伊東さんらしさがあってもいいのではないですか」と言われました。事務所のスタッフにこの案を見せたときにも、「伊東さん、もうちょっと何かやってもいいよな」とみんな言っていたらしい。でも私はやっぱりここから始めるのがいいんじゃないかなと思いい、いろいろ考えた末にこれをもっていくことにしたんです。もちろん自分の中に、普段考えている住居とこの案の間には大きなギャップがあります。でも、その問題を考えることこそ、この東北の場所ですべきことではないかと思っています。もう一軒やったら、もう少し自分を取り戻せるかもしれないなと思います。もう実施図面を大体描き終わり、9月13日に起式を行い、10月末にはでき上がる予定です。2度目に行ったときには、みなさん喜んでくださって、できたときには一緒に芋煮会をやるかなみたいなことを言ってくれて、楽しみにしています(写8)。



写7 宮城野区のみんなの家の模型

# 定住するとは何か

内山節十 糸長浩司

3・11は、人と地域のかかわり方をわれわれに問いかける。津波で壊滅的な打撃を受けた三陸の沿岸部ばかりでなく、原発事故により避難を余儀なくされた地域の復興をどう進めるべきか。哲学者は、定住と非定住という2元論的な考え方を退け、定住といわれる農村にも、さまざまな人の移動という現象をあげ、定住とは、永遠の営みへの確信であると言っ。

糸長 今、内山さんは「関係という主体」が非常に重要だと言われました。

建築にかかわる者として、関係性のデザインをどう考えたらいいのか。内山さんはレジュメの中で構築ではなくて創造だと書かれていますけれども、そこら辺をぜひ伺いたい、あるいは建築の関係者に熱い叱責の言葉でもいいです。

——知性では表現できないもの

内山 今、どんな分野もそうですが、専門家が主導権をと

ることに間違いがある気がしています。専門家は知らない、というわけではなくて、専門家と素人という方をあえてすれば、専門家は、素人たちがつくることとする世界のサポート役であるし、場合によったら素人たちのしもべだと言ってもいい。

今回、原発事故で私たちが感じたことは、専門家だけの世界がもっている暴走というか、非常に危なさを感じたといえますが、結局そこに素人が入っていくことがまったくできていない。素人が入ろうとすると専門家たちによってガードされる。土木の世界でもそうなんだけれど、昔の河

川土木だと、地域の人たちが、つまり素人がこの川をなんとか抑えようとしてやった。もちろん、当然専門知識は足りないわけで、そこに専門家がしもべのように入ってきて、そこできちっとした仕事をした。それが今は何人の一般住宅でさえ、素人はこういう部屋が欲しいとだけ言って、専門家に設計を丸投げする。

私たちはそこにどういう共同(関係)をつくるかということです。本当に身体性に基づく関係とか生命性に基づく関係を知っているのはそこに住んでいる人たちですから、その人たちのいわば、知性では表現できない、それを人によっては「暗黙知」と言ったりもしますが、そういうものをどうやって軸において自分たちが協力関係を結べるかからどんな分野でも必要になってくると思っています。

糸長 あともう一点いいですか。地産地消やバイオリジョンというように、私たちは場所性を信頼してきたけど、原発の放射能がらみで、場所性への信頼性がなくなりつつあるわけですね。自然と人間の場所性の関係性が主体だと、内山さんは言いますが、一方で場所性の身体

性を否定されている人たちは今後それをどうやって築いていくのかという、そのことについて、われわれも悩んでいます。

——定住とは永遠の営みへの確信

内山 それについて、2つのことを考えています。ひとつは、日本の社会は、特に農村社会は定住社会と言われてきたけれども、実は定住社会の内部の移動性というのがあるんですね。絶えず移動性を内部にもった定住社会をつくってきた。たとえば私のいる上野村でも、千年以上続いていると思われる家がある一方で、江戸の終わりごろに入ってきた人、明治以降に入ってきた人がけっこうたくさんいるわけで、「うち先祖代々」といいながら何代前からの先祖代々かという、3代前とか5代前とか、長い歴史として見るならばごく最近だという人が、たくさんいる。さらに養子というかたちで、昔は入ってくる人もたくさんいたし、もちろん嫁というかたちで入ってくる人もいます。だから、日本の社会を簡単に定住対非定住と単純な二分法的に見るのは間違いであって、定住社会のなかにも移動があっ

# 未来の建築・まちについて

糸長浩司＋横張真＋野原文男＋ヨコミゾマコト＋広井良典＋中谷礼仁＋  
岡部明子＋牧紀男＋伊東豊雄＋佐藤滋＋中村勉

建築分野を超えたパネリスト10人による対話。共通の認識は、3・11が、日本社会が底で抱えていた矛盾を一挙に顕在化させたということである。地震・津波による天災・人災に加えて、福島原発事故は、巨大科学技術に依存する社会の脆弱性を改めてわれわれに問う。3・11を考えることは、これからの社会を構想することである。

## 2つのテーマ

糸長 進め方ですが、最初に先ほど登壇していない7人の方にそれぞれのプレゼンテーションを3分を限度でお願いします。その後ディスカッションへ移ります。

お題は2つです。まず、大震災を受けて各自の思想、テ

ザイン、あるいは創造行為がどう変わったのか、あるいはどう変わっていくのか。職能のことも含めてお話しいただきたい。

つぎに、建築にかかわる者として、震災後の新たな建築・都市・地域をどう切り開いていくべきなのか。パネラーの中には、建築系ではない方もおられますが、その場合には、

建築に対しての期待を話していただきたい。

それでは今からプレゼンテーションに入ります。横張さん、よろしくお願いします。

## 7人のプレゼンテーション

### safe to fail

横張 私どもの研究グループは今、岩手県の大槌町に入っております。お手元の資料はそのレポートです（158～163頁参照）。東京大学の気象海洋研究所がもともと大槌にあり、そのご縁で大槌とかわりをもっています。本日はその背景にある基本的な考え方を中心に話をしたいと思います。

この絵は、16世紀のパリです（図1）。緻密な市街地と田園地帯が非常に明瞭に峻別されているのが見て取れます。こうした都市と農村の峻別というのは近代の都市計画の最も根源的な発想のひとつであったと思います。つまり、ホモジニアスな都市と農村が存在していて、両者は混じらない。なるべく両者を峻別して、中間色を使用しないというのが近代都市計画の基本的な発想のひとつであったと思



図1 16世紀のパリ

